

2020年度

年題聖句

「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」

(コリントの信徒への手紙一 12:27)

今月の聖書から

待つという恵み (使徒言行録 2:1-21)

鶴沼めぐみルーテル教会 梁 熙梅 (やん ひめ) 牧師

復活のイエスさまに出会った弟子たちは、イエスさまが天に昇って自分たちから見えなくなっても、悲しくありませんでした。彼らは強くなれたのです。なぜでしょうか。復活



されたイエスさまが、弟子たちの真ん中に現れ、弟子たちの弱さに触れ、傷を癒してくださったからです (ヨハネ20:15-19)。そして目に見えなくても、一緒におられるということが信じられるようになりました。

ところが、それですべてが終わったわけではありません。イエスさまは、天に昇られる前に、こう弟子たちに告げられたのです。「高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」(ルカ 24:49) と。待つように！ あなたの力ではなく、上からの力が与えられるまで待つようにと。

「待つ」ということは、キリスト教信仰の歩みの中でとても大切なことです。聖書の中の信仰の先輩たちには、常に待つことが求められました。ヨナは巨大な魚のお腹で三日三晩待ちました。救い主を身ごもることが告げられたマリアは、自分の体を通して神の大いなる力が働かれることを待つ人になりました (ルカ 1:26-38)。

エル・グレコ「五旬節」

エルサレム神殿のシメオンと預言者アンナは、長い間、救い主のお生まれを待っていました (ルカ 2:22-38)。ですから、救い主に会えたときの喜びは、もう死んでもいいと言うほど大きなものでした。その時にシメオンが歌った賛歌は、私たちが毎週の主日礼拝の最後に歌っているメンク・ディミティスです。イエスさまは、十字架の上で死んで復活されるまで、陰府の中で待ちました。神さまの大いなる力が働かれるところでは、皆が待っています。それは、必要不可欠なことだったからです。

待つという時、その時の中では、表面には見えなくても、はかり知れない大きな力が働いています。まるで、春に芽生えるために冬の土の中で、命あるものがものすごい力で、動いているようです。とてもダイナミックな力が、暗闇を光に変えるために、不安や恐れを喜びに変えるために、死を命に変えるために働いているのです。ですから、待つということは受動的ではなく、とても能動的な働きなのです。

主の弟子たちも、大いなる力に覆われるまで都で待つように、と言われました。待っていた一同は聖霊に満たされ、異なる言語で話す人々に神さまのメッセージを届ける者にされました。

今、私たちも待っています。早く新型コロナウイルスの力が弱まることを。早く自由に動けることを。いつもの日常に戻れるように待っています。待つという時の中で、静かに、

しかしダイナミックに働かれる聖霊に気づき、その力に支えられるように祈ります。

イースターと卵 今年のイースターは4月12日（日）でしたね。この日には、卵がプレゼントされますが、以下はそのお話です。（「よくわかるキリスト教の暦」今橋・朗著、キリスト新聞社刊）

***イースターと卵**

日本でも、復活祭（イースター）に教会に行くときと礼拝の後で、美しく彩色された卵をもらえるのがかなり一般的です。

世界中どこでも、特にロシアや東ヨーロッパの国々では、昔からイースターに卵は付きものでした。

その理由には、諸説俗説いろいろあって紹介しきれませんが、古い殻を破ってひよこが出てくるイメージが、キリストの復活を連想させたこと、長い受難節（レント）という断食期が終って、肉食を控えていた人々がまず卵を食べて喜んだこと、この日、森のうさぎが子どもたちに卵をプレゼントしてくれるという言い伝え、その他、「ロザリンドと卵」という美しい中世伝説もあります。ユダヤ教のパスカ（過越の祭）の食卓にも、卵が登場します。また、ドイツなどには、ネコヤナギの枝に卵をつけて飾り、春の到来を表す風習もあります。



5月、6月の礼拝・行事予定など（状況により、変更することがあります）

教 会	幼 稚 園	教 会 学 校
5/ 3（日）復活節第4主日	5/13（月）2020年度入園式	小・中科ともに5/10（日）以降。
10（日）同 5主日	22（金）春の遠足	
17（日）同 6主日	6/ 5（金）—6（土）年長キャンプ	5/10（日）母の日
24（日）同 7主日	14（日）親子礼拝	17（日）春の遠足
信徒説教：竹内章浩兄		31（日）ペンテコステ
31（日）ペンテコステ		礼拝
6/ 7（日）三位一体主日		6/14（日）親子礼拝
14（日）聖霊降臨後第2主日（親子礼拝）		21（日）父の日